

将来 ○広大移転 ○プロ野球 ○旅行 ○免許
○河合奈保子 ○松田聖子 ○夏休みの計画

Q7, Q8を通してサークル活動あり、遊びあり
勉強ありでいろいろな人物がいて大いに結構。今の
時期には大学の講義とは別に、大いに遊び、大いに

読書し、大いに勉強すべきだろう。

以上、アンケートの結果と、それに対する編集部
なりのコメントをまとめてみた。はたして読者はこ
のアンケートにどのような見解を持つだろうか？

今日も元気だ56生!!西条の巻

編 集 部

午後1時50分、多少の時間的遅れと、もう少し
美しいバスガイドおくれと共に総勢約106名は、
広大を出発しました。目立ちたがりのKとNは見送
る在校生たちにせい一杯の愛敬をふりまき、挙句の
はてには電停の女性にも別れの挨拶。白い眼の返事
にもめげず、「明るい総科56生」は一路西条へ。

楽しい楽しいバスの旅。交通渋滞のイライラも、
地域住民との対話(「おい坊主、ここどこや?」「
どこの学校?」)や、校歌せい唱、仮面ライダーの
歌でまぎらわしていました。田植えも近き田んぼが
ひろがり、人影もまばらになると、しだいにバス
の中の空気が重々しくなってきました。「ここが西条
かっ!」「四年になったらここへ来るんかっ!」
「不安の総科56生」でした。

小高い研修センターに着くとすぐさま、大研修室
へ。学部長代理の挨拶に続くは、高橋先生の講演「
人間と環境」。結局は山火事には気を付けようとの
ことでした。今夜のために本能的に眠っていた人が
多くいたようでした。センターの係員さんの諸注意
のあと、各自指定の宿泊室へ。ここでア然としたの
が、約半数の男たち。なんと彼らは研修センターの
きれいな部屋と女性たちと離れて器具庫へ。



「なんという差別だぁー! わしらは器具かぁー!」
夜空に向かって叫びました。今にも空は泣きだしそ
うでした。

5時半から夕食と入浴。器具庫組は食堂に入れず
まず入浴。この日のために、体のアカをとっておい
たという下宿生は風呂に大歓喜!陽気な奴らは隣り
の女湯にとどけとばかり春歌の大合唱。楽しくアカ
を落としたあとは、楽しい食事が……待っていませ
んでした。ガランとした食堂で器具庫組はそれなり
に楽しく食事をしました。

7時半からは文系、理系に分かれての「研修」。
文系、理系どっちつかずの「こうもり男」は少数で
あったようでした。理系の笑い声を尻耳に、文系で
は激しい討論を経ながら各コースの説明がなされま
した。個人的に専門的な質問も出ましたが、全体的
な討論という型には発展せず、あまり有益な研修と
はいえませんでした。が、最後に飲んだビールはう
まかったです。



8時半からは、さあ、待ちに待った「特別研修」
の時間です。かわいそうな器具庫組の所へ、女性た
ちと二人の先生が加わり、大競演。「あ、あの人が
あんな芸を……。」「やっぱりやったか。」の感想

と共に、歌やおどりで大熱気。M先生の奇妙な合いの手も交えながら、一人一人と役者が出現。official な消灯時間もなんのその、酒やジュースは次々売れたが、出演依頼はきれません。「安芸の国」合唱12時まではのどをからして叫びました。

先生たちが「おやすみ」とひき上げていっても、若いエネルギーはまだありあまっています。器具庫組の勇士たちは夜ばいを敢行しました。ところが、二度とも失敗におわり、あえなく徹退。センター組を羨ましく思い、闇に向かって叫びました。「神保オ〜、真邦子オ〜。」外はまったくの闇で、人家はまったく見あたりません。不燃焼エネルギーをいくらでも吸いこんでしまうような自然がそこにあるだけでした。仕方がないのでわずかな虎の子の酒をチビリチビリとやりながら、器具庫組約10名が人生論から女の話(主にこれだが)の花を咲かせました。四時半頃、器具庫組の悲しみを知るかのように雨が落ちてきました。「あしたのソフトはどうなるんや」と心配しながら消灯しました。

明けて17日、午前六時頃、空は曇っていますが雨は落ちていません。「ソフトができるぞお〜」、誰かが叫びました。すると、その声で曇りが振動したのか雨が落ちてきました。なんとというソフト中止の時は、チューター別の演芸会の予定です。はっきり言って芸は昨日、出しつくしたのです。不安のまゝ、我々は朝食を取りました。



朝食を取り終わった8時半から、チューター別の「研修」がありました。入学後のガイダンス以来のチューター別行動で、その時はっきりしていなかった姿形が身近な会話の内に認識されるようになりました。このような少人数での研修はできるだけ、今後もとるべきだと思われまゝ。

11時から昼食。これは今までの内で最高のメニューでした。久々の肉が食えた後はどうにか雨もやみ、ついにきましたソフトボール大会。授業さばっ

て練習した成果を見せる時。かなり個性的なプレーヤーも出現しました。チアガールのN君、満場をわかせた投球術を見せたI君、一番人をさそって練習したくせに、アッサリ三振したK君、女の声援に上がってしまったY君など……。ところが、盛り上がりかけた所へ、雨の襲来。やむえず二試合で中断。いかんともしがたい天候でした。



2時半、雨に濡れた体をふくと、だされたのは掃除命令。昨夜のあとかたづけを念入りに行なった器具庫組、やっと愛着のつきかけた器具庫をあとにしました。センター内でしばしの時間ゲームをしましたが、この辺から疲れの見え始めた人が……。そして最後の行事、表彰式。ソフトボールを盛り上げた人々が色々な賞品を獲得しました。その後、せかさされるようにバスに乗ると、ちゃんとガイドさんが変わっていました。

帰りのバスは、にぎやかな人がひどくにぎやかで、笑う人は笑っていましたが、疲れて寝ている人には、ひどく雑音に聞こえたはず。広大には5時すぎに着き、各チューターごとに反省会に散って行きました。さあ、明日も元気でいこう!

1日ちょっとの研修でしたが、腹を割って話せる友人が増えたと思います。筆者の見てない事は書けませんが、これを読んで下さったみなさんが自分個人の思い出をひき出すきっかけとなれば幸いです。思いシャープペンシルをおきます。

西条研修 PART I 「より深い交流を」

5645066 高田 かおる

西条研修の意義は、結局、何だったのか。おそらくオリエンテーション・キャンプのそれと変わりないと思う。つまり、より深い交流を創り出すことであらう。

総科へ入って、学部内の結束がとかく話題になることが、初めは不思議だった。けれど、次第に慣れると、総科が強い結束を目標にしており、またそれを実現できるのは総科しかないという気がしてきた。

入学以来、総科56生というのは、とにかく明るい雰囲気だった。西条研修も、まるでバス遠足にでも行くような調子で始まった。

5月16日、あっけない程空間的な西条に、いささか戸惑いながら研修センターへ入った。やや気疲れのする講演と、夕食のあと、文系と理系に分かれての研修。教授の方々の心使いで、堅苦しい研修というより、談和会といった感じで、一番心に残っている。殊に私は、教授に近い席にいたため、より親近感を覚えたのかも知れないが、あのように教授と話せる機会がもっとあれば、という気がする。

夜。チューターグループ別に、或いは勝手気ままに集まって、歌ったり、レクリエーションに興じたり、いわば、自主的な友好研修で過ごした。同じ総科で、顔は知っていても話したことがなかったとか、名前を知らなかったとか、そんな人が少しずつ減って

いくのは、とても気分のいいものだった。

2日目は、午前のチューター別研修、そして午後のソフトボール大会。西条研修で何が一番良かったかと尋ねたら、ソフトボールだと答える人は多いのではないだろうか。チームが決定したときから、それぞれのチーム内の団結は深まり、試合のときは絶頂にあった。途中から降りだした雨が、いっそう盛り上らせたけれど、惜しくも中止となった。

帰る間際の表彰式は、入所式と同じ部屋で行われたけれど、研修センターに来たばかりの時とは、まるで違う空気が流れていた。

総科56生の明るさには、少し空騒ぎな部分があった。それが消えてはいないけれど、その明るさは嘘じゃない、私達は本当にみんなで団結できるんだと、そんな気がした。

100人余の仲間と、彼らに共通の、ひとつの心を乗せて、バスは広島へと向った。この先、今の結束を保ち、強化していくか否かは、私達次第であると思う。

西条研修 PART II 「円盤の襲来」

5645122 山田 順二

16日(土)の夜、ぼく達4・8チューターグループは、なぜかしらオリエンテーション・キャンプの再現をしていました。つまり、オリキャンで覚えたゲームを手当たり次第やっていた訳です。八百屋さんでみんなの名前を確かめた後、震源地当て、大工のキツツキさん、ロック・マイ・ソウル等々……。

震源地——S君がさんざん馬鹿にされました。というのも彼の辺りで握手の伝わるペースが鈍るからなのですが、犯人は外の人だったのかも知れません。面白かったのは、実際はほとんど波を出さなかったY君がほとんど毎回疑われたこと。メガネの奥のニヤケた眼つきのせいなのでしょうか？

(外のゲームは飛ばして)とかくするうち夜も更けました。がぜんノッてきたぼく達は知る人ぞ知るあの「円盤」をおっ始めることになったのです。するとそこへ足元の危なっかしいM先生が現われて、すぐに止めて寝ろ、と言います。と、その舌の根の乾かぬうちに、若い者が集まれば何かあるのが当然だ、みたいなことを言う訳です。ぼく達は拍子抜けがしてその夜の円盤は燃焼し尽くさないまま不時着したのです。

17日(日)ソフトボール大会では我がウサギさんチームは残敗。しかし、ぼく達は降りしきる雨の中やったのです、円盤を。リード「エンバン・エンバン」—同(繰り返し)、「O△型エンバン(繰り返し)」「□×型エンバン(繰り返し)」「が」「やって来た(繰り返し)」「西条グラウンドにやって来た(繰り返し)」「たまげた、たまげた、た—まげた(繰り返し)」—熱気、汗、4・8チューターは完全燃焼しました。そして、湯気を立てながら研修センターへ走って戻ったのです。

5時30分過ぎ、広大へ帰りついたぼく達は、半地下の15号教室で簡単に反省会を済ませ、総科の玄関前に出ました。落込みのS君にリードをとらせて再度円盤をやりました。そして、後から出てきた総科の仲間達と「安芸の国」を大声で歌ったのです。総科ってイイところだなあ、

今、オリキャンに思うこと

5645006 石川 明 徳

「連帯のいとぐちをとらえる」こういう言葉が、今年度入学生の手引きの、オリキャンの説明中にある。これがオリキャンの趣旨である。その象徴たる第一の行事は、キャンプファイアーであろう。

日の落ちたファイアー場のざわめきが消えて、火の神の声に唱和する頃になると、私達の心の中に、これから始まろうとする祭典への期待が、ずっしりと重くのしかかって来た。そして点火……炎が燃え上がると同時に私達の重圧は燃え尽くされ、祭典への参加者になる。その躍動感が、いたる所から伝わってくる。「すごい!」「すばらしい!」周囲の者達が、そう叫んでいる。フェローと新入生、先輩と後輩といった関係はなかった。誰もがオリキャンに参加した一人一人の仲間として存在し、燃え上がる炎を見つめ、レクに参加している。炎天下のレクで疲れた人達も、その疲れを忘れたかのように騒いでいる——あの時誰もが、オリキャンに参加して良かったと、思ったのではないだろうか。

ファイナルで、トーチの火がひとつひとつのロウソクに移され、光の輪が広がる中、私達はさっきまでの騒ぎとは異なった意味で、心のつながりを感じ

ながら、ファイアー場を後にした。

キャンプでは、今まで知らなかった者同志が、急速に親しくなるということがよくある。それは、キャンプという場が、日常の生活とは異なった雰囲気にあるから、ということかもしれない。確かにそうであろうが、みんな自分を素直に表現し、認識しあっていることもひとつの理由ではあるまいか。キャンプでは、認識しあうことは必須の事項である。お互いの存在を、尊重して活動していかなければならない。

総科で長い間言い続けられ、伝統となっていることに、強い連帯がある。みんなが協力し合って、押し進めていくのが総科である。今、56年度総科生は、着実な一歩を踏み出し始めている。この歩みが続く限り、私達はあのファイアーの前で感じた、心のつながりを忘れてはならない。

もう早いもので、オリキャンから1ヶ月余り、まだ心の中に、あのロウソクの火は、燃えているだろうか。

<シリーズ・学問のすすめ>

その14 衝撃波の研究と私の夢

江 田 憲 彰



私の研究分野は流体物理である。現在は衝撃波加熱による気体の電離過程を調べている。ここでは詳しいことは省略し、衝撃波についての話と、将来の夢を述べる。

衝撃波というのは、超音速で飛行する飛行機の翼端から発する衝撃波と同じものである。衝撃波が通過すると、その波面の前後で種々の物理量の飛躍が起る。波面背後では急激に圧力・温度・密度が大となる。例えば、1気圧の空気中でマッハ2（音速の2倍）で伝わる垂直衝撃波を考えると、波面背後

では圧力は4.5気圧、温度は約200℃になる。これがマッハ5の速度では29気圧、1440℃にもなるのである。原爆の爆発で起きた衝撃波は、球面衝撃波として伝播していくのであるが、衝撃波の性質からもあの惨状は予期され得た。この球面衝撃波の波面前後の関係式は1943年に英のG. I. Taylor が求めたものであるが、軍事的要請から発表がとめられ、1946年に発表されたものである。米英は連合国であったから、原爆開発の科学者達はこの式のことを知り得ていたであろう。直接に原爆の開発に携わった者、またその及ぼす物理的影響を計算した者等、ここにも科学者の良心、社会的責任の重さの一端をかいまみる思いがする。現在の

科学研究は何らかの形で軍事に結びつかないものはないといわれる。悪用された時の威力がどれ程のものであるか知り得る研究者達は、その科学の成果がどの様に使われるか見とどける責任がある。しかし自分も含めてであるが、現在の研究者を考えれば各人それぞれ蝸壺に入った状態で、研究を通じて自分の自然観、社会観を切り開き、社会的存在意義をみとおす姿勢が弱い。加えて見かけ上研究者があふれている状態が作られており過当競争により、いわゆる業績が求められる。こうなれば、安易な報告書作りで追われ、研究者としての自覚・責任などはふっ飛んでしまいがちである。こうなってはいけない。これを克服するには、研究体制等考えるべき問題は多々あるが、自分にはこれを論ずる知識に乏しい、最後は己れの良心が基となるであろう。

さて、この衝撃波を簡単に発生させるには衝撃波管を用いる。これは管を隔膜で2つの気室に分けたもので、一方に高気圧の気体を入れもう一方を低圧にし、膜を急にとり除くことで低圧室側に衝撃波を発生させる。現在手持ちの装置で、波面の速度約3000 m/s、クリプトンガスでマッハ数約13が得られる。この時の衝撃波背後の温度は約15000℃となる。衝撃波前後の変化がステップ状であることを利用して主に化学の分野で反応速度を研究するのに用いられている。また、物理・工学の世界でも超音速風洞として用いたり、より強い衝撃波では背後が高温になるので、熱電離プラズマの研究にも用いられる。私の研究対象もこれである。更に強い衝撃波を作り、核融合を行なわせようという試みもある。その際のモデルはディーゼルエンジンと同じで、衝撃波管を用い、燃料の重水素を少量管の中に注ぎ込み、衝撃波を飛ばし、高温・高密度プラズマを作り核融合を行なわせる。これを一定の周期でくり返し行なわせようというわけである。

現在我々のところでは、衝撃波背後の急激な変化を利用して、気体の熱電離のメカニズムを追っている。

これまで惰ガスを用いて実験して来たが、この電離のメカニズムは、途中で第一励起準位に原子のエネルギー状態が上げられ、その後電離へと進むことが分った。これからは簡単な二原子分子とガスを混合し、二原子分子の解離が、電離にどの様に影響するかを追求する。

現在の装置では一発の衝撃波を発生させるのに丸一日かかる。これは主に低圧室を真空に引き、測定部(マッハツェンダー干渉計)を調整するのに費される。準備万端整えば「発射」ということになるのである。が、およそ10のバルブやコックの操作・測定部のオシロの調整・接写カメラのセット等、直前にやるべき項目がたくさんあり、テンテコマイである。測定系に関しては、単発の衝撃波にうまく同期してデータをとらなければならない。この同期に失敗すれば実験データは一つもとれない。失敗すれば、高価な試料気体、また時間がすべて無に帰する。まさに毎回発射の瞬間は祈る気持である。

以上が今やっていることと、近い将来にやろうとしていることである。この研究自体には、環境科学コースの学生の教育に直接結びつくものは少ない。直接学部の学生に還元できるものとして、言葉通りの環境問題を扱ってみたい。将来の夢というのはこれである。研究者は一度決めた進路は変え難い。自然科学では特にそうである。が、流体物理で、流れの問題を扱っているので、この手法を活用し、海流のシミュレーション及び観測データ収集等をやりたい。これらの実測データは、行政官庁(特に海上保安庁等)が時々行なっているが、シミュレーションを行なうにはデータ数が足りない。これまでの観測のやり方では莫大な費用を要するが、現在では長期間の観測を行なわせるシステムが、手近な計算機を組み込むことで可能で安価に出来る。まずは観測機器の開発よりとりかかりたい。学部の若い人達に触発されて、いっしょにやってみてみたいものである。(基礎科学研究・助手)

<シリーズ・学問のすすめ>

その15 社会人類学

山下晋司

Q: 社会人類学ってあまり聞き慣れないことばだけれど、どんな学問なんですか? 文化人類学とどう違

うのですか?

A: 簡単にいうと、文化人類学は主にアメリカで発